

# JOHAニューズレター

第46号

## 日本オーラル・ヒストリー学会第22回大会 (JOHA22) のご案内

日本オーラル・ヒストリー学会第22回大会 (JOHA22) が 2024年9月13日 (金)・14日 (土)・15日 (日) に青森公立大学ほかにて開催されます。お誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

※ 本大会は**現地報告のみ**で開催いたします。オンラインでは開催いたしません。

※ 13日 (金) はエクスカージョンを予定しています。

### 【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第22回大会	II. 理事会報告	19
会	第11期第2回理事会 (2024年7月14日)	
会長・開催校挨拶		2
1. 大会プログラム	III. お知らせ	
2. 自由報告要旨	1. IOHAのお知らせ	21
3. ワークショップ/ラウンドテーブル「伝統文化をアーカイブする」	2. 会員異動	22
4. シンポジウム「戦争トラウマの継承とオーラル・ヒストリー」	3. 2024年度会費納入のお願い	23
		18

.....

\*ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

# I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第22回大会

## Japan Oral History Association 22nd Annual Conference

### 《会長挨拶》

酷暑で心身ともに疲弊しがちな日々が続いておりますが、皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。今年度の年次大会は「日本の各地域への注目」ということで、9月14・15日に青森市内で開催します。青森市が誇るねぶた祭りをテーマにした大会校企画ワークショップの準備が進められており、13日のエクスカージョンも大変充実した内容になっています。併せて参加することにより、「地域に根ざした文化と生」について視点を深めることができるのではないかと思います。また、大会シンポジウムでは戦争が残した傷跡であるトラウマに着目します。終戦から80年の節目に向けてJOHAならではの課題・問題意識を探っていく場にもなるのではないのでしょうか。たくさんの方にご参加いただけますと幸いです。

JOHA 会長 石川良子

### 《開催校挨拶》

昨年の沖縄に続き、青森という地方都市で開催できることを嬉しく思っています。地方都市では人口減少にともない様々な課題があると言われております。また行政はもちろんのこと、研究書などでも将来地方都市が消滅するといったような言説が流布されています。しかしながら、本当に地方は言われるほど危機的な状況なののでしょうか。むしろ私には、課題は確かにあるものの、可能性やチャンスに溢れているように見えます。そしてそれに地元の人たち、特に若い世代が気づきはじめています。

今回の青森大会では、地方の特色を最大限に生かした学会大会にしようと思っております。青森は海も山も温泉もあります。また地元には豊かな食材があふれています。さらには世界に誇れる文化があります。そしてそれらを生かし、特色のある地域づくりに向けた取り組みが多く行われています。是非この大会を機に、地域の文化や人と触れ合い、そしてご自身の研究や地域に反映させていただきたいと考えています。青森は心から皆さんを待っています。是非足を運んでいただきたいとおもいます。

開催校理事 佐々木てる

開催日：2024年9月13日（金）・14日（土）・15日（日）

13日（金）はエクスカージョンを予定

会場：青森公立大学（〒030-0196 青森市大字合子沢字山崎 153-4）

及び青森県観光物産館アスパム（〒030-0803 青森県青森市安方1丁目1-40）

主催：日本オーラル・ヒストリー学会

協力：青森ねぶたメディア・アーカイブ研究会

開催方法：対面のみ

参加費：一般 3000円、学生その他 1000円

※「その他」には年収200万円以下の方が該当します。

参加費の支払い方法： peatix にて事前にチケットをご購入ください。

購入ページ

<https://2024.joha22.peatix.com/>

支払いには以下の決済方法をお使いいただけます。

- ・クレジットカード (VISA、MasterCard、JCB、AMEX、Discover、Diners Club)
- ・コンビニ (Lawson、FamilyMart、Ministop、Daily Yamazaki、Seicomart)  
(手数料 220 円は購入者負担)
- ・ATM (Pay-easy、ゆうちょ銀行、ジャパンネット銀行、楽天銀行、じぶん銀行)
- ・PayPal

<注意事項>

- ・購入期限は 2024 年 9 月 11 日(水) 18:00 (コンビニ・ATM での支払いは 9 月 10 日まで) です。
- ・会場受付にてチケット (スマホ画面または印刷したもの) をスタッフにご提示ください。
- ・領収書は原則発行いたしません。利用明細書・引き落とし明細書・コンビニ発行の領収書・peatix 発行の領収データなどを領収書の代替としてご利用ください。
- ・当日大会会場での受付はできませんのでご注意ください。
- ・県からの学会助成の申請のために、チケット購入時に宿泊に関する情報をフォームにご入力いただきます。何卒ご理解いただきますようお願い申し上げます。

◎ 自由報告者へのお願い

- 1) 自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分 (合計 30 分) で構成されています。
- 2) 報告者へのお願い：報告資料は 9 月 9 日 (月) までに下記 2 つのアドレスにお送りいただくと、大会参加者のみが閲覧できるようにします。m747996(at)nifty.com, joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp  
事前にお送りいただいた方が会場配布資料を作成するかどうかは任意です。もし事前送付が間に合わない場合、50 部の印刷をお願いします。なお、会場にコピー機はありません。

## 1. 大会プログラム

### ◆ 9 月 13 日 (金) エクスカーション

地域の語りと伝承を考える ～ねぶた文化を通じてみる～

#### 【趣旨】

人口減少が進む中、これまでつちかかってきた地域の伝統をいかに後世に継承していくかは、各地方地域の課題となっている。こういった文化伝承の問題を、近年では地域×アートの街づくりによって発展的に解消しようとしている地域もある。ここでは「人の語り」の伝承はもちろん、それを様々な形態で継承していく (身体表現の継承、モノのアーカイブ化など) 積極的な試みが行われている。ひるがえって、日本オーラル・ヒストリー学会としてはまさしく「今、現場でどのような取り組みが行われているのか」を聞く作業は重要である。なにより市井の人の語りに耳をかたむけ、伝統文化・歴史性を継承そしてそれ

をさらに新しい形として発展させていく取り組みを知ることは学会の主眼であるはずだ。

今回の青森大会では約 300 年続く「ねぶた」の近年の形、そしてそれを中心とした街づくりに取り組む人々、さらに伝統文化の継承を積極的に活用している様を実際に聞いて、見て、体験してもらう。これら地域文化の語りを聞き、実際に体験することを通じて、各地方地域の大学と地域の関係性の在り方も今後考えていく機会となる。また学会 1 日目の午後では、「ねぶた」の伝統継承の方法を、報告してもらうことで、この問題意識をさらに発展させていくこととする。

**【概要】**

募集人数 23 人 費用 5,000 円 (夕食込み)

13:00 ねぶたの家 ワ・ラッセ集合

ねぶた師による解説 (人数制限なし: 入場料各自)

14:00 出発 23 人

14:20 浅虫温泉到着

浅虫 3 施設訪問 解説

16:00 伝統文化の担い手とのトーク

17:00 浅虫温泉宿泊者チェック・イン

19:00 津軽伝統文化体験

20:30 解散

市内ホテル→移動 (宿泊者はそのまま/市内ホテルまでの送迎 有)

大会 1 日目 2024/9/14 (於: 青森県観光物産館アスパム 4 階)			
	会場 1 (十和田)	会場 2 (八甲田)	会場 3 (しらかみ)
9:15-9:30	開会あいさつ (会長) ・ 日程説明 (研活) → 各会場移動		
9:30-10:00	HAO XIANGYU	木谷彰宏	吹原豊
10:00-10:30	大塚匠	謝花直美	西本陽一
10:30-11:00	テーマセッション 「今、聞き手のポジ ションナリティを問う」	吉成哲平・三好恵真子	奈良雅美
11:00-11:30		島崎遥・藤代陸	木川剛志
11:30-12:00		小口藍子	中原逸郎
12:00-12:30	昼休み (理事会)		
12:30-13:00			
13:00-13:30			

13:30-14:00	大会校企画ワークショップ「伝統文化をアーカイブする」 (会場1 十和田)
14:00-14:30	
14:30-15:00	
15:00-15:30	
15:30-16:00	
16:00-16:30	総会
16:30-17:00	
17:30-	懇親会 (アスパム 14 階 うみとひかり)

大会 2 日目 2024/9/15 (於：青森公立大学)			
	会場 1 (543 室)	会場 2 (544 室)	会場 3 (545 室)
9:30-10:00	久野亜希子	中村貴	小谷英里
10:00-10:30	吉本裕子	朱子奇	屈帥帥
10:30-11:00	馬場由美子	王石諾・三好恵真子	各務宇春
11:00-11:30	松平けあき	酒井順子	岡田祥子
11:30-12:00	高橋脩里	坂本知壽子	原田利恵
12:00-13:00	昼休み		
13:00-13:30	大会シンポジウム「戦争トラウマの継承とオーラル・ヒストリー」 (545 室)		
13:30-14:00			
14:00-14:30			
14:30-15:00			
15:00-15:30			
15:30-16:00			
16:00-16:30	閉会挨拶 (会長・開催校理事・次期開催校理事あいさつ)		

◆ 9月14日(土)

会場 青森県観光物産館アスパム 4 階

9:15 会場1 集合 開会あいさつ (会長 石川良子)  
開催内容説明 (研活 大門正克)

9:25 各会場へ移動

9:30～12:00 自由報告部会 1日目

● 会場1 (十和田)

司会：根本雅也 (一橋大学)

HAO XIANGYU 「オーラルヒストリーからみる中国人の対日イメージ：高齢者と若者に注目して」

大塚匠 「魚商人「目利き」の構造：東京魚仲卸業の語りから」

張唯 (テーマセッション) 「今、聞き手のポジショナリティを問う：中国帰国者の語りはどう構築されるのか」

● 会場2 (八甲田)

司会：安岡健一 (大阪大学)、小黒純 (同志社大学)

木谷彰宏 「エゴ・ドキュメントをいかに読めばよいか：作文集『沖縄の子ら』を読みなおす」

謝花直美 「政治の磁場」としての沖縄戦食糧問題：沖縄島北部の軍民関係変化を事例として」

吉成哲平・三好恵美子 「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」：写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感」

島崎遙・藤代陸 「高度経済成長期以前の八幡洞海湾における船上生活：子ども時代に船上生活を経験した姉妹への聞き取り調査をもとに」

小口藍子 「男たちはなぜ化粧するのか：現代日本男性のライフストーリーから」

◆ 会場3 (しらかみ)

司会：酒井朋子 (京都大学)、梶本歩美 (国際教養大学)

吹原豊 「開かれた祖国への扉：あるミナハサ日系人のライフストーリーから」

西本陽一 「北タイ山地少数民族ラフによる「ビルマ(族)」の語り：キリスト教徒ラフ族にとっての異郷と故地」

奈良雅美 「異文化の狭間で揺れる絆：日本に住むフィリピン人女性のライフストーリー」

木川剛志 「和歌山県の海外移住者の研究：木曜島白蝶貝産業における移民のライフストーリー」

中原逸郎 「花街(かがい)の回想：新聞掲載「花街誌」を参考に」

12:00～13:30 昼休憩 理事会

13:30～16:00 大会校企画 ワークショップ (会場1 十和田)

16:00～17:00 総会

◆ 9月15日 (日)

9:30～12:00 自由報告部会 2日目

会場 青森公立大学

● 会場1 (543室)

司会：小林多寿子（一橋大学）、清水亮（慶応義塾大学）

久野亜希子「アイヌ女性の「学び」の語りを読み解く：アイヌ民族研究における対話的構築主義を手がかりとして」

吉本裕子「観光地で和人がアイヌ舞踊の踊り手になる：和人女性の経験的語りから」

馬場由美子「ウルグアイ日本人移民の拠点「日本人会会館」とコミュニティの変容：一世たちの語りから」

松平けあき「日系アメリカ人二世従軍のオーラル・ヒストリー：アーカイブ化された資料の研究利用をめぐる」

高橋侑里「解放と再生の帝国主義神話 “Americanization of world justice” “に対峙するアジア系によるアクティビズムの可能性と限界」

## ● 会場2（544室）

司会：佐野直子（愛知県立大学）、能川泰治（金沢大学）

中村貴「現代上海在住日本人における「上海ロックダウン」の語り：非日常の日常化と彼らの位置性（positionality）を中心として」

朱子奇「1990年代における中国テレビ・ドキュメンタリーの制作手法の転換：日中の制作者たちの証言から」

王石諾・三好恵真子「日中「二つの東北」を生きる結婚移民の中国人女性たち」

酒井順子「市民の主体的参加による地域オーラル・ヒストリーの可能性：近郊都市として発展した基地の街で聞こえる/聞こえない多様な声を探して」

坂本知壽子「出会わなければならない、しかしもう聞き取ることはできない語りとのつながり方：過去に確かに存在した他者の苦痛は語り継げるのか」

## ● 会場3（545室）

司会：橋本みゆき（立教大学ほか兼任講師）、今野日出晴（岩手大学）

小谷英里「長崎で加害の歴史を伝える人々の実践の生成過程：原爆被害との接点に着目して」

屈帥帥「中国人被爆者の原爆体験が遺族に与えた影響：強制連行労働者の被爆者の子孫を対象にした聞き取り調査から」

各務宇春「両親や祖父母など身近な人を対象にしたオーラル・ヒストリーの意義と方法」

岡田祥子「風呂屋の息子は風呂屋するの嫌なんですよ」：大阪市生野区「めがね温泉」の経営継承をめぐる語りから」

原田利恵「水俣病被害地域における流産・死産：生まれなかった命に関する証言」

## 2. 自由報告要旨

【1日目】9:30～12:00 青森県観光物産館アスパム

### ● 会場1（十和田）

HAO XIANGYU（岡山大学大学院 院生）

「オーラルヒストリーからみる中国人の対日イメージ：高齢者と若者に注目して」

本研究ではオーラルヒストリーを採用し、日中戦争の主な戦場となった地域（河北省邯鄲市永年区小北汪村、大北汪村、河北省邯鄲市涉県、河北省保定市望都県付庄村、後庄村、沈荘村）と戦争の影響が少なかった地域（江西省贛州市）及び都市（北京市、上海市）に赴いて高齢者15名、若者8名の計23名に対し半構造インタビューを実施した。結果、戦争経験者は自身の戦争経験の記憶と教育やメディアで描かれる反日的なイメージとを結びつけ、より日本に対するネガティブなイメージを深めていたということが明らかとなった。本報告は、主に中国人の高齢者たちの日中戦争記憶の部分を中心に報告する。過去の戦争での彼らの実際の経験と戦後彼らの考えを両国の人々に伝え、日中両国の戦争歴史問題の和解を推進する。

大塚匠（京都芸術大学大学院 研究員）

「魚商人「目利き」の構造：東京魚仲卸業の語りから」

本報告は、東京魚仲卸業の語りの考察、魚商人の「目利き」に関する研究報告である。

一見習いは見て習え。この類は能動的な技術習得を求められるゆえ、書物等に遺されることが少ない。本研究は魚商人の「目利き」の在り方を明らかにすること、文化史料の一助となることの意義をもつ。魚仲卸業の語りの分析、AI目利きシステムとの比較考察から「目利き」に関わる語りを4つに類型化し、その総体を「対話知」と定義づけた。不確実性が高い天然物と対峙する魚仲卸業の「対話知」は、偶発を愉しみ、論理的矛盾を飲み込みながら環境変化とニーズを繋ぎ合わせる高度なコミュニケーションであり、「人間の思考を固定化せず鮮やかなままにする思考の知である」と主張したい。

(テーマセッション)「今、聞き手のポジショナリティを問う：中国帰国者の語りはどう構築されるのか」

コーディネーター：張唯（筑波大学大学院 院生）

劉罡（名古屋大学大学院 院生）

張唯（筑波大学大学院 院生）

森川麗華（東京大学大学院 院生）

山崎哲（一橋大学大学院 院生）

コメンテーター：蘭信三（大和大学）

ライフストーリー研究においては、聞き手のポジショナリティやそれをふまえて「いかに語られたか」に着目することについて議論が重ねられてきた。本テーマセッションは、中国帰国者研究におけるこの問題について検討するものである。従来中国帰国者研究では、「日本人」、中国帰国者二世、「中国人」留学生による聞き取りが行われてきた。近年では、若い世代の「中国人」留学生による聞き取りはもちろん、中国帰国者三世・四世の研究者によるものも見られる。かれらは、それぞれの立場から、どのように中国帰国者と向き合い、いかなる聞き取りをし、それを自分のポジショナリティを含めどのように記述して



きたのか。そして、それは、従来の立場の人々の聞き取りとどのように異なるのか。本テーマセッションでは、戦後 80 年を目前に控え、語り手も聞き手も変容するなかでどのような語りが生産されるのかを、聞き手のポジショナリティに着目して検討する。なお、司会進行は伊吹唯（社会理論・動態研究所員）が担当する。

#### 劉罡（名古屋大学大学院 院生）

##### 「中国帰国者」に関する先行研究と現在の動向：日中比較の視点から」

本報告は、社会面と学術面において、日中比較の視点から、中国帰国者の当事者がどのように社会的に議論され、かれらをめぐる諸問題がどのように研究されてきたかを長期的に振り返り、中国帰国者研究の現状と今後の課題を試論するものである。まず、中国帰国者を生み出した歴史的背景を粗描し、戦後・帝国後・冷戦後といった時空間におけるかれらの重層的な位置づけを再確認する。次に、80 年代の日本社会における残留婦人・孤児に対する注目の追い風として発展してきた中国帰国者研究の諸成果を整理したうえで、その到達点を指摘する。それに合わせるかたちで、中国社会とアカデミアにおける中国帰国者認識と研究動向を紹介する。

#### 張唯（筑波大学大学院 院生）

##### 「中国残留孤児」の語りにくさ：中国での経験をどう語るか」

本発表は、「中国残留孤児」の語りにくさを手がかりに、多様な孤児像を記述することを目的とする。国家賠償訴訟運動をきっかけに、「棄民」と「人間性回復」の言説が盛んになった。両言説は、孤児らの人生の一部を代弁したが、決して彼らの人生の全部ではなかった。孤児らは、単に被害の客体だけではなく、生活主体でもある。しかし、これまでの研究では、孤児らの中国での生活経験を見過ぎてしまうと云わざるをえない。人生の前半を中国で過ごした孤児らにとって、「中国経験」はいかなる意味を持つか、彼ら・彼女らの人間形成にいかなる影響を与えてきたかを問わなければならない。そこで、本発表では、中国人留学生というポジションを活用し、モデル・ストーリーから距離をとりつつ、新たな孤児語りを提示したい。

#### 森川麗華（東京大学大学院 院生）

##### 「四世が聴く「中国残留婦人」」

本報告では、「中国残留婦人」である曾祖母への聴き取りを通して考えた、報告者の四世としてのポジショナリティを検討する。報告者にとって聴き取り調査は、家族の語りを聴くことでもあり同時に、曾祖母を研究対象として位置づけることでもある。それだけでなく、このような研究を行うことは、報告者自身が「当事者」の一人として眼差されることも意味する。この複数の属性が重なり合う中で聴き取りを行うことで、聴ける／ないものは何かを検討し、「当事者」として眼差されることによって生まれる葛藤の存在を提示しながら、それでも、曾祖母へ聴き取りを行うことの意義について論じたい。

#### 山崎哲（一橋大学大学院 院生）

##### 「聞き手として、語り手としての中国帰国者三世の困難」

中国帰国者三世研究において、地域（公営団地や学校など）という空間に基づく可視性が重要な前提とな

ってきた。だが、中国残留日本人の永住帰国の本格的な始まりから数十年の時間が経過した現在、かれらの子や孫の居住地は集住地にとどまらなくなっている。本報告では、こうした背景をもつ三世に三世当事者の報告者がかれらの生活史を聞くことはどのような意味を持つのかについて論じる。具体的には、当事者でもあり研究者でもあるという報告者の聞き手のポジショナリティがインタビュー場面でいかに機能するのかについて検討していく。

コメンテーター：蘭信三（大和大学）

「語りをめぐるポリティクス」

中国帰国者の世代交代のなか、そのライフストーリーの語りをめぐるポジショナリティは、新たな局面を迎えつつある。そのことはライフストーリー研究にどのような展開をもたらすのか、4名の報告を手掛かりに論じたい。

## ● 会場2（八甲田）

木谷彰宏（同志社大学 特別任用助手）

「エゴ・ドキュメントをいかに読めばよいか：作文集『沖縄の子ら』を読みなおす」

沖縄戦から地続きの米占領下の沖縄について語った様々なエゴ・ドキュメントがある。これまでも、それらをもとに、沖縄の歴史や社会についての研究が進められてきた。子どもの経験から沖縄の戦後の歴史を見出そうとするとき、その媒介となるのがエゴ・ドキュメントである。本報告では、子どもが自らの経験を記したエゴ・ドキュメントの一つである、作文に注目する。そのうち、沖縄の子どもが綴った作文が収録されている作文集の一つに『沖縄の子ら』がある。これについては、すでに沖縄教職員会による「国民教育」を考察した研究があるが、本報告では史資料論的観点から、それらの作文をどのように読めばよいかを検討するものである。

謝花直美（同志社大学 嘱託研究員）

「政治の磁場」としての沖縄戦食糧問題：沖縄島北部の軍民関係変化を事例として」

沖縄戦記録は数多くの住民証言が残るが、食糧問題を中心にしたものはほとんどない。『沖縄県史』などの証言では、食糧は戦闘に備えた食糧増産、戦中には避難途中の食糧確保の困難、飢餓として記録されてきた。食糧を巡る個々の体験の記録はあるものの、なぜそのような事態になったのかは、十分に解明されていない。本報告では、餓死者が多かったとされる沖縄島北部を取り上げる。この地域は戦局の推移とともに、中南部の人々の「立退き」地域、北部の日本軍の戦闘と山中立てこもり地域、米軍による収容地区一が重なりあいながら変容した。流動的な場で、食糧問題が日本軍と沖縄の人々の関係の変化を映す「政治の磁場」となっていたことを報告する。

吉成哲平（大阪大学大学院 院生）・三好恵美子（大阪大学）

「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」：写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感」

米軍統治下の沖縄の現実の衝撃を契機に同地を撮り続けた写真家・東松照明は、1970年代前半にかけて沖縄の島々から東南アジアを旅した足跡が知られる。他方で既存研究では、東松が当時の「土着」への関心から島々を見つめる過程で、沖縄海洋博に伴う開発により後景化する基地の現実を忘却していった足

跡が定型的に論じられてきた。しかし前報で具体化した、東松が沖縄で出会った人びとから内省した重層的歴史を踏まえた時、彼が向き合った復帰後の沖縄の複雑な現実が見過ごされてきた点が課題である。そこで本発表は、独自の方法論である「写真実践」により、東松が「日本人」であることを自問する中で、過疎化の進む「シマの複雑な表情」を受け止めつつ、高度成長の陰で薄れゆく生活の実感を確かめていった意味を報告する。

**島崎遥（近畿大学大学院 院生）・藤代陸（株式会社 地域文化財研究所）**

**「高度経済成長期以前の八幡洞海湾における船上生活：子ども時代に船上生活を経験した姉妹への聞き取り調査をもとに」**

本報告では子ども時代に船上生活を送っていた福岡県北九州市八幡東区在住の姉妹への聞き取り調査をもとに、八幡洞海湾における高度経済成長期以前の船上生活者の暮らしを描出する。姉妹の両親は広島県大崎上島の出身であり、敗戦後に父親が復員したことを機に舩船での労働と生活を開始した。妹は1965年の旧港湾労働法制定により船上生活が禁止されるまで、姉は結婚によって「陸（おか）に上がる」まで船上生活を送っていた。姉妹の家族史、子どもの目線から見た舩船・学校・児童ホームでの生活や周辺の労働者について、若松洞海湾における船上生活の事例との比較を交えつつ考察する。

**小口藍子（お茶の水女子大学 院生）**

**「男たちはなぜ化粧するのか：現代日本男性のライフストーリーから」**

本報告の目的は、現代日本で化粧をする男性たちの語りから、彼らが自らの生に化粧実践をどのように位置付けているかを明らかにすることである。現代日本男性の化粧実践は1980年代頃から徐々に活性化するが、一人ひとりの男性がなぜ化粧することを選択し、いかに化粧とともに生きているかは十分に検討されていない。そこで本報告は日本で日常的に化粧する20代男性2名のライフストーリーを、特に彼らが化粧に「武器」のメタファーを付与する語りに着目して分析する。「武器」の語りを通して、彼らの化粧実践が顔を美しく装う手段に留まらず、彼らの生のなかで立ち現れる問題関心に呼応しながら再形成される営みであることが浮かび上がる。

**◆ 会場3（しらかみ）**

**吹原豊（福岡女子大学）**

**「開かれた祖国への扉：あるミナハサ日系人のライフストーリーから」**

茨城県東茨城郡大洗町は、国内有数のインドネシア人集住地であり、その中心になっているのがミナハサ地方出身の日系人（以下、ミナハサ日系人）である。最初のミナハサ日系人4名が大洗町に移住したのは1998年7月であり、いずれも沖縄の離島出身者A氏の孫にあたる人たちであった。本発表では、A氏の子であるB氏のライフストーリーから、B氏が父A氏や祖国日本にどのような思いを抱き、結果としてどのように日系移民の祖国への還流の扉を開いたのかについて、B氏の関与者らからの聞き取り情報を交えながら述べる。また、祖国への扉を開いたのちのB氏の人生をたどりながら、B氏本人、および子どもや孫世代が直面する問題についても述べていきたい。

西本陽一（熊本県立大学）

「北タイ山地少数民族ラフによる「ビルマ（族）」の語り：キリスト教徒ラフ族にとっての異郷と故地」

1997年に北タイのキリスト教徒ラフ村で人類学的フィールドワークを始めた私は当初、タイ国家の統治拡大と周辺少数民族の応答という枠組みを描いていたが、フィールドの現実はそれと全く違っていた。殆どの村人はビルマからの避難民で、いまでもビルマとの行き来があり、村人にとっては「タイ」や「北タイ族」と同じくらい、「ビルマ」と「ビルマ族」は大きな意味をもっていた。本報告は、北タイのキリスト教徒ラフ村民による「ビルマ（族）」をめぐる語りを報告し、その語りの持つ意味、さらには彼らにとって「異郷」と「故地」とは何かを考察する。理論的には、私たちとは異なる他者理解のために、住民自身による語りを取りあげる意味について考える。

奈良雅美（特定非営利活動法人 アジア女性自立プロジェクト）

「異文化の狭間で揺れる絆：日本に住むフィリピン人女性のライフヒストリー」

日本に暮らすフィリピン女性たちのライフヒストリーの聞き書きを通じて、異なる文化や家族の間という複層的な狭間を生きる彼女たちの葛藤を明らかにする。ある女性は、日本人夫のDVと離婚紛争の苦しみを経ても子育てを元夫と共同で行おうとし、暴力ではなく、言葉の力で、新たな関係を創り出した。また別の女性は、フィリピンの家族を支え、子どもを育てるために日本人男性と結婚するが、夫と自分の双方の打算の中で互いのニーズを満たす奇妙なバランスにいることを語る。彼女たちは、家族の絆を大切なものと認識しながら、他方で大きな負担を強いられ、さまざまな狭間で翻弄されている。彼女たちは、語りのプロセスの中で過去と向き合い、どのように生きるべきかを自ら問い直す。

木川剛志（和歌山大学）

「和歌山県の海外移住者の研究：木曜島白蝶貝産業における移民のライフストーリー」

和歌山県は、明治以降の近代化に伴う貧困問題により、多くの海外移住者を送り出してきた。成功を収めた移住者たちは帰国後、美浜や田並に瀟洒な洋風建築を建て、これらの地域は「アメリカ村」と呼ばれるようになった。オーストラリアの木曜島は、明治時代の高級ボタンの原料である白蝶貝の一大産地であり、和歌山から潜水技術に優れた若者が多く移住した。明治30年頃には、木曜島への移住者は1000人を超え、その多くが和歌山県出身者であった。本発表では、木曜島における和歌山県出身の移住者の子孫へのインタビューを通じて得た移民のライフストーリーを紹介する。

中原逸郎（楓錦会）

「花街（かがい）の回想：新聞掲載「花街誌」を参考に」

花街（かがい）は舞踊等の芸と地元の花街言葉でもてなす場で、台湾では風月（風流）地区を花街柳巷、花柳街と呼び、中国本土を舞台とした映画「花街」（香港、1950）があること、ベトナム、韓国等に旧花街地区を認められることからアジア圏に伝播した明や清文化の一部とすることが自然ではないかと考える。花街は鎖国時代（1639-1854）に発達を遂げ、日本に辛うじて残る「もてなし文化」の一部と言えよう。しかし、大正期から昭和中期にかけ全盛を誇った京都の花街も、高度成長時代（1955-68）、大阪万国博覧会、ニクソンショック等の影響により、変化が生じたのではないかと仮設した。そのため、本発表では新聞記事を元に花街生活者の回想を記録した。

【2日目】9:30~12:00 青森公立大学

● 会場1 (543室)

久野亜希子 (東京都立大学大学院 院生)

「アイヌ女性の「学び」の語りを読み解く：アイヌ民族研究における対話的構築主義を手がかりとして」  
本報告では、アイヌ民族運動に関わってきた1人のアイヌ女性のライフストーリー分析から、戦後のアイヌ文化復興運動を通じていかにアイヌ文化を学ぶことができたのかを明らかにする。アイヌ民族を対象とした従来の聞き取り調査におけるアイヌと和人（非アイヌの日本人）の研究上の権力関係を批判的に検討した上で、対話的構築主義を手がかりとして同調査を通じて執筆した卒業論文等を自己批判し、修士論文にて語りの再分析を試みた。聞き手と語り手を語りの主体として描き出すことで浮かび上がった29歳の〈アイヌとの出会い〉を境界に交差する「アイヌ文化を知らない自己」と「アイヌ文化を学ぶ自己」という「学び」の語りを読み解いていく。

吉本裕子 (横浜市立大学 客員研究員)

「観光地で和人がアイヌ舞踊の踊り手になる：和人女性の経験的語りから」

近年、北海道内の一部の観光地ではアイヌ舞踊専門の劇場が設けられ、伝統舞踊のみならず現代の要素を取り込んだ新たな演目も上演されている。しかし、踊り手不足が深刻化しており、運営主体は出自を問わずアイヌ文化に関心を持っている人材も積極的に採用する傾向にある。和人女性Aさんは、観光地Xで文化の担い手として採用され、一通りの文化学習と伝統舞踊のレッスンを受けたのち、幼少期から民族舞踊を学んできたアイヌ出自の踊り手らとともに舞台に立っている。上演中に踊り手それぞれの出自が問われることはないが、観光地の劇場でアイヌ独自の舞踊を「見（魅）せる」という意味においては、踊りの技法のほかに、演出のための「アイヌらしさ」や身体性が求められることもある。本報告では、民族舞踊専門の劇場で「見（魅）せるための舞踊」を上演し、アイヌ舞踊の踊り手としての立ち位置を獲得していく過程が、マジョリティ側である和人にとってどのような経験であったのかを、Aさんの語りを中心に考察する。

馬場由美子 (愛知県立大学大学院 院生)

「ウルグアイ日本人移民の拠点「日本人会会館」とコミュニティの変容：一世たちの語りから」

1908年に最初の日本人移民が到着したとされるウルグアイは、戦前戦後を通じて集団移民がなく、現在は推定350人という小規模コミュニティを形成している。個人単位の移民や転住者が散住する中、1933年には親睦を目的に在ウルグアイ日本人会が設立された。戦後は交流の「場」を求める機運が高まり、全会員に寄付を募って家屋を購入、1972年に日本人会会館が誕生した。利用は会員に限定されたが、会員数の減少に伴う資金難から2000年には広く門戸を開いた。一方、一世は二世への継承という戦略を持たず、次世代の足は遠のきつつある。本発表ではこの会館の来歴を一世の語りでたどり、研究蓄積が乏しいウルグアイ日系コミュニティの変容を明らかにする。

松平けあき (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)

「日系アメリカ人二世従軍のオーラル・ヒストリー：アーカイブ化された資料の研究利用をめぐって」

日系アメリカ人二世の第二次世界大戦従軍経験は、これまで多く聞き取られ、アーカイブ化された音声やトランスクリプトが公開されてきた。報告者は、これまでハワイにおいて従軍経験者にインタビューを行ってきたと同時に、アーカイブ化されたインタビュー資料も参照してきた。自身のインタビューを用いた研究では、対話的構築主義を念頭にインタビュアーとして自身がインタビューイーに与える影響等を考慮してきたが、アーカイブ化されたインタビュー資料では、インタビューの背景等も分析に含めた深い考察が難しいと感じてきた。本報告では、アーカイブ化されたインタビュー資料を、自身が聞き取ったインタビューとともに研究においてどのように両立させながら分析することができるのか検討したい。

#### 高橋侑里（摂南大学）

##### 「解放と再生の帝国主義神話 “Americanization of world justice” に対峙するアジア系によるアクティビズムの可能性と限界」

本報告では、アジア系アメリカ人の戦争記憶をめぐる、そのポリティクスに内包される可能性と限界について検討する。アメリカ国内でのアジア系の政治経済的影響力の上昇と、冷戦の終結、不均等な同化圧力、加速するグローバリゼーションとそれに抗する流れといった錯綜するなかで、アジア系アメリカ人の活動はアメリカ国内とアジア地域にいかなるポリティクスを持ち込みうるのか。またトランプ政権の誕生によって、一部ではアメリカの例外主義は、終焉に向かうと論じられている中、冷戦秩序のイデオロギーとしての「解放と再生の帝国主義神話 (Americanization of World Justice)」の作用について、現地調査から得たデータに基づいて分析、検証する。

#### ● 会場2 (544室)

##### 中村貴（新潟国際情報大学）

##### 「現代上海在住日本人における「上海ロックダウン」の語り：非日常の日常化と彼らの位置性 (positionality) を中心として」

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は 2019 年末より世界的な流行が始まり、現在 (2024 年) においても終息を迎えていない。中国・上海市では、感染の拡大を抑制するため 2022 年 3 月末から 5 月末にかけて、ロックダウン (都市封鎖) が実施された。当時上海に滞在していた日本人は、感染の恐れや先行きへの不安を抱きながら、外出が制限された状況下で生活を送っていた。彼らの生活にとって、それは非日常が日常化していくプロセスであったといえる。また、上海でのロックダウン体験は、現地語の習熟度・生活状況・滞在歴などにより異なるものとなり、また日本と中国の「はざま」に生きる彼らの位置性 (positionality) を改めて浮かび上がらせるものとなった。

##### 朱子奇（東京大学大学院 院生）

「1990 年代における中国テレビ・ドキュメンタリーの制作手法の転換：日中の制作者たちの証言から」  
1991 年、中国中央テレビ (CCTV) と東京放送 (現 TBS) が共同で制作した番組はそれぞれ、「望長城」と「萬里の長城」のタイトルで放送された。CCTV の「望長城」は中国のテレビ・ドキュメンタリーの草分けと言われている番組である。それまで、作家による脚本と文学的なナレーションが重視される「作家テレビ」がドキュメンタリー番組の一般的な作り方であったが、「望長城」は現場の記録を重視する方法論

へと転換し、現実主義ドキュメンタリーとして注目を集めた。では、なぜこうした方法論の変化が生じたのか？本研究は、当時の中国の社会的背景、メディア業界の状況および日中両方の番組制作者へのインタビューに基づいて、「望長城」で見られた中国におけるテレビ・ドキュメンタリーの方法論の転換について議論する。

**王石諾（大阪大学大学院 院生）・三好恵真子（大阪大学）**

「日中「二つの東北」を生きる結婚移民の中国人女性たち」

報告者らのこれまでの調査では、歴史的な文脈から日本と関係性の深い中国東北地方に生まれ、結婚により福島県に移住し、日中「二つの東北」を移動する女性たちの眼差しに焦点を当ててきた。その結果、中国東北の独特な土地柄で生まれ育った中で形成され、また来日の移動経験により立体化してきた彼女らの「満洲」記憶が浮かび上がってきた。その成果の連続的視座に立ち、本報告では、女性たちの日本への移動の切っ掛けとなる大きな社会転換である、80年代以降の中国東北の「単位制」の弱体化を視野に入れつつ、彼女らの人生史に接近していく。そして、その身体感覚を内面化しつつ日本の東北部の痛みを次第に理解しながらこの地に留まり続けることを選択する意味について、彼女らのライフストーリーから迫っていく。

**酒井順子（歴史工房やまと、史の会&早稲田大学ジェンダー研究所招聘研究員）**

「市民の主体的参加による地域オーラル・ヒストリーの可能性：近郊都市として発展した基地の街で聞こえる/聞こえない多様な声を探して」

本報告は、海軍厚木飛行場が街の中心に広大な面積を占める基地の街における市民主体の地域オーラル・ヒストリー・プロジェクトの試みの紹介である。街は、高度成長期の始まりと共に村々が合併して市となったが、産業構造の変化と地域間格差、基地の存在と住民運動のせめぎ合い、難民や移民などの多様なルーツを持つ人々との共生などの課題を多く抱えている。オーラル・ヒストリーは、戦後の録音機器の大衆化と歴史運動としての民衆史（History from Below）の結節点として期待されてきた。しかし、残念ながら、オーラル・ヒストリーという考え方を知る市民は少ない。本報告では、もはや牧歌的な市民賛美は難しい状況のもとで、あえて「市民主体」を掲げ、個々の人々の経験という「無形の文化遺産の保存活動」としての地域オーラル・ヒストリーの試みを提示してみたい。多様な市民が関わることによって、街の多様性を再現できるのではないだろうか。

**坂本知壽子（立命館大学 授業担当講師）**

「出会わなければならない、しかしもう聞き取ることはできない語りとのつながり方：過去に確かに存在した他者の苦痛は語り継げるのか」

明治の糸引き女工の晩年であった1960年代に、彼女たちに聞き取り調査を行った山本茂美は『あゝ野麦峠』を出版した。本作品はTVのドラマ化や映画化により、今日に至るまで女工イメージとして日本社会に定着している。一方、女工たちの苦痛を否認（denial）する主張もある。しかし現在では、明治時代の女工はもちろん、彼女たちの暮らしを知る者とさえも繋がるのが困難になりつつあり、両者の観点は議論にすらならない。本報告では、聞き取られた語りの再現のされ方や消費のされ方、さらには解釈のされ方について、女工たちの故郷である送り出し地域と、製糸工場があった受け入れ地域における語りの

違いに着目し、他者の苦痛に対する語りの多層性を概観することから始める。さらに彼女たちが生存していた時代に記録された語りが、聞き取られっぱなしになっている現状で、もう一度、語りのカケラを探し集め、彼女たちの生(life)とのつながり方を模索する。世代交代を繰り返す社会において、聞き取られた語りにも寿命はあるのか。オーラルヒストリーの「その先」について考えてみたい。

### ● 会場3 (545室)

小谷英里 (一橋大学大学院 院生)

「長崎で加害の歴史を伝える人々の実践の生成過程：原爆被害との接点に着目して」

本報告では、地域社会・長崎で、侵略戦争や植民地支配といった加害の歴史を伝える実践がなぜ、どのように生み出されたのかについて、長崎人権平和資料館(旧・岡まさはる記念長崎平和資料館)の運営を担う人々の語りを通じて明らかにする。とりわけ、かれらが加害を伝える実践に踏み出す契機に、原爆被害と対峙する経験がどのように関わっているのかに着目し、考察する。戦争体験やその継承に関する先行研究は、加害と被害の重層的な関係に目を向ける重要性について論じてきた。本報告では、こうした先行研究の問題意識を引き継ぎつつ検討し、原爆被害と加害の歴史伝承のつながりの一端について指摘する。

屈帥帥 (大阪大学大学院 院生)

「中国人被爆者の原爆体験が遺族に与えた影響：強制連行労働者の被爆者の子孫を対象にした聞き取り調査から」

広島原爆投下時、戦時中に強制連行され強制労働させられた中国人労働者が存在した。しかし、広島被爆者研究の中で中国人被爆者の研究は圧倒的に不足している。筆者は2020年、中国人被爆者の子孫を対象に聞き取り調査を実施した。調査では、被爆二世を含む中国人被爆者の子孫が被爆者の原爆体験の影響を受け、健康への不安、過去の記憶の回避、記録されていない原爆責任や被爆者への同情が語られた。本稿では中国人被爆者の原爆体験を説明し、遺族の聞き取り調査の語りを分析して、中国人被爆者の原爆体験が遺族に与えた影響を考察する。

各務宇春 (立命館大学 職員)

「両親や祖父母など身近な人を対象にしたオーラル・ヒストリーの意義と方法」

現代社会において、両親や祖父母の歴史を聴く機会は少なく、その重要性はあまり認識されていない。多くの人々は、両親や祖父母の歴史を断片的に聴くことはあっても、意図的に時間をかけて聴くことはほとんどない。しかし、オーラル・ヒストリーの取り組みは、話し手にとって自身の人生を振り返る貴重な機会となり、聞き手にとっては話し手への敬意を示すと同時に、聞き取った内容が聞き手の人生の糧となることが期待される。一方で、近親者への聞き取りには独特の難しさがある。本報告では、近親者への聞き取りの実際とその課題、及びそれらへの対応策について検討する。

岡田祥子 (大阪大学大学院 院生)

「風呂屋の息子は風呂屋するの嫌なんですよ」：大阪市生野区「めがね温泉」の経営継承をめぐる語りから」

銭湯、風呂屋、湯屋とも呼ばれ、私たちの生活に身近な公衆浴場とは何だろうか。法令では「公衆を入浴



させる施設」とされ「一般公衆浴場」と「その他の公衆浴場」に分類される。本報告では「一般公衆浴場」を取りあげ、定義を確認した後、歴史と業態の変遷を追う。とりわけ、一般公衆浴場が近代都市生活に必要な不可欠なインフラだった時代から、自家風呂保有者の増加によってその使命をなかば無くしながらもなお半公共的な存在として存続する現在に至るまでの、浴場業者の苦勞とやりがいと悩みを、1955年から大阪市生野区で「めがね温泉」を經營してきた宮前博・博一親子の語りから聴きとり、二世帯が経験した時代と社会の特性と変化を浮き彫りにする。

#### 原田利恵（国立水俣病総合研究センター 主任研究員）

##### 「水俣病被害地域における流産・死産：生まれなかった命に関する証言」

熊本水俣病被害地域において、多発していたとされる死産や流産などの異常妊娠の実態についてアプローチを試みる。汚染が激しかった時期に妊産婦であった世代は高齢化し、直接話を聞くことが困難になっている中、繰り返し死産・流産を経験した90代の女性や胎児性水俣病の子どもを産み、苦悩の末に人工流産を選択した女性の貴重な証言を得ることができた。新潟水俣病被害地域では行政による妊娠規制が行われ、妊娠規制に対する裁判も起こされたため、公的な記録があるが、熊本水俣病については、異常妊娠に関する公的なデータはなく、母たちの記憶に残るのみである。ただ、女性たちは水俣病と共存し、産み続けたと信じられている。熊本水俣病において空白になっている領域に関して、死産・流産にまつわる母親たちの喪失、女性だけに背負わされがちな環境汚染の負荷を個人のライフヒストリーを通じて明らかにすることとする。

## 2. ワークショップ／ラウンドテーブル

### 「伝統文化をアーカイブする～『青森ねぶた祭』を支える人々の取り組み～」

#### 【趣旨】

近年多くの地域で、伝統文化や特色のあるアートを軸に地域活性化を進める事例が報告されている。すなわち地域社会にもともとある、なんらかのコンテンツを捉えなおし、新しく展開することによって、地域の特色を浮かび上がらせているのである。これらの取り組みは、各自治体が悩む人口減少対策や、観光客の誘致の一つの対応策ともなっている。

これらの取り組みを青森市で考えるならば、現在「ねぶた」そのものを街の特色としてもっと活用する取り組みがはじまっている。市内公共施設はもとより、宿泊施設、飲食店にもねぶたが飾られているし、またねぶたの制作技法を使用したアート作品も多く誕生している。これらの取り組みの背景には「ねぶた文化」というものを支えている、関係者の努力が背景にある。本ワークショップでは、青森ねぶた文化を様々なメディアを通じて発信している方々をお呼びして活動内容を伺うことにする。そしてその活動内容から、人々の語りをはじめとする、地域の声をいかに後世に残していくかを考えていくことにする。（佐々木てる）

#### 【大会1日目 13:30-16:00】

コーディネーター・主旨説明：佐々木てる（青森公立大学）

司会：阿南透（江戸川大学）

活動内容報告：

林広海（ねぶた師）：ねぶた文化のアーカイブ化 ～HP の紹介～

佐藤隆史（ものの芽舎 取締役）：雑誌からみる「青森ねぶた祭」

稲葉千秋（ABA アナウンサー）：「青森ねぶた師」を撮ること、映すこと

コメンテーター：石川良子（立教大学）

オーラル・ヒストリー研究からみたアーカイブの取り組み

3 グループにて Free トーク

## V. 大会シンポジウム

### 「戦争トラウマの継承とオーラル・ヒストリー～聴き手論と語り手論」

#### 【趣旨】

戦後79年を迎え、戦争体験者が次々と姿を消していく中で、日中戦争や第二次大戦が残した傷はいまだ癒えず、戦争がほんとうに終わったとはいえません。今年のJOHAシンポジウムでは戦争のトラウマに現在取り組んでいる方々をお招きし、戦争トラウマのオーラルヒストリーの「聴き手論」「語り手論」についてディスカッションすることになりました。

まず、日本兵の子孫への聴き取りから、日本兵のトラウマを扱っている中村江里（上智大学史学科・以下敬称略）に現在の調査結果をご報告いただき、次に、日中戦争の記憶の継承を長年調査している石井弓（東北大学・東北アジア研究センター）に、中国での最新の調査結果をトラウマ理論に基づきご報告頂きます。次に、第二次大戦の連合軍捕虜・民間人抑留者とその家族のオーラルヒストリーを行っている中尾知代（岡山大学）が、日本軍が遺したトラウマ・PTSDについて発表します。

続けて、沖縄戦争に詳しい謝花直美（沖縄大学・同志社大学・沖縄国際大学）をいれてラウンドテーブルでディスカッションを行います。

日本兵がトラウマを受けた原因となった、中国側の戦争のトラウマとの議論の組み合わせは初めてのことであり、また、敵対国・勝者の家族に残る傷に光をあてるのもまれです。

また、本シンポジウムでは、トラウマ記憶を聴く場合の二次受傷についても論じ、特に女性である聴き手たちがどのように工夫して自分の生活と組み合わせつつ、フィールド型オーラルヒストリーの調査を行うかについてもシェアします。ラウンドテーブルでなくては出ないような話もあるかもしれません。さらに、トラウマを受けた人々が「語る」ことによってどのような影響を受けるかについても考えます。

戦争にかぎらず、トラウマ記憶のオーラルヒストリーをしている方々にも興味深いイベントになると思います。ふるってご参加ください。また、フロアからの質問にも時間をとり、活発な議論を期待しています。（中尾知代）

#### 【大会2日目 13:00-16:00】

司会：謝花直美（同志社大学）

1時～1時5分 シンポジウム趣旨説明：中尾知代（岡山大学）

1時5分～2時20分 発表：中村江里（上智大学）・石井弓（東北大学）・中尾知代（岡山大学）

2時20分～2時半 休憩

2時半～3時15分 ラウンドテーブル

3時15分～4時 フロアとの質疑応答

※ 青森公立大学発—青森駅行のバスは16.25、16.28 発

## II. 理事会報告

### 1. 第11期 第2回理事会 議事録

日時：2024年7月14日（金）11:00～（オンライン）

出席者：石川良子、大門正克、小黒純、北村毅、佐々木てる、酒井順子、酒井朋子、佐藤量、清水亮、中尾知代、根本雅也、橋本みゆき、森亜紀子、李洪章（敬称略）

議事録：森亜紀子

#### 報告・審議事項

##### 1. 大会について

【開催校（青森公立大学）理事より】佐々木開催校理事から現在までの準備状況について説明があった。日程は2024年9月13（金）13:00～20:30のエクスカージョンは、「地域の語りと伝承を考える～ねぶた文化を通じてみる～」と題し、300年続く「ねぶた」の多様な継承・活用・発展のあり方を実際に体感できるようなプログラムとなっている。大門理事によれば、9月14日（土）15日（日）の自由報告枠にはすでに多数の応募があり、シンポジウムを含め司会やコメンテーターを調整中である。青森県の補助金を活用する関係上、今大会参加者の宿泊総数が青森県内の宿で100泊になるのが望ましい。参加者は、大会・エクスカージョンそれぞれ別にPeatixで参加費・宿泊費等を支払うことになるが、その際には、宿泊に関するアンケートとる可能性がある（誰が青森県内のどこに何泊宿泊したかを把握するため）。

【研究活動委員会より】中尾理事より、大会2日目（9月14日）の大会シンポジウムについての説明があった。テーマは「戦争トラウマ/トラウマ記憶の継承—聴き手論と語り手論—」とし、報告者は中村江里氏、石井弓氏、中尾理事、司会は謝花理事の方向で調整中である。聴き手と語り手は、聴く/語る行為を通してどのように変化するのか、女性が聴き手である場合トラウマ記憶の語りはどのような影響を受けるのか等のいくつかの論点についてラウンドテーブル形式で行い、被害/加害が交錯する複雑な様相を浮き彫りにしたいと考えている。また、フロアを交えた議論に十分な時間を割き、戦争に限らずトラウマ記憶を聴くすべての人に役立つ企画になるよう努めたいとの説明があった。橋本理事から、「報告者・司会が女性のみであるため、男性参加者が発言しにくいのではないか」との指摘があったが、そのような場合には、司会の謝花理事が男性の発言を促すような呼びかけをするなど工夫を行い、フロア全体で議論が活発になるよう意識することになった。

##### 2. 各委員会より

【研究活動委員会】謝花理事から、2025年3月22日（土）に沖縄で開催予定の実践交流会「食の聞き書きを通して考える（仮）」についての準備状況について説明があった。「長寿の島」として知られる沖縄

だが、食についての記録のほとんどは、首里王府の料理を解説したものである。他方で、庶民の食を生産と労働の場とのかかわりから論じたものは少ない。今回の実践交流会では、山城紀子氏、金城笑子氏、岡本直美氏に、日々の料理とその作り手であった女性の経験、反戦平和運動との関わりについて論じてもらう予定。報告者にはすでに依頼済み、場所は沖縄県立博物館美術館に確定している。参加者の輪を広げるため、学生アルバイトを雇いハイブリット形式で実施する。大会シンポジウムと同様、登壇者がみな女性であることについて議論があった。大門理事からは、報告者のジェンダーバランスを考えるとともに、食の現場でみられる性別役割分業をジェンダーの視点から意識的に分析してみる良い機会になるのではないかとの提起があった。

また大門理事より、2025年6月に、神奈川県大和市で行われているオーラル・ヒストリーを地域で立ち上げる試みに関するフィールドワークを行う旨、告知があった。

**【編集委員会】**北村理事より、『日本オーラル・ヒストリー研究』第20号の編集作業の進捗について報告があった。第20号の原稿募集の結果、13本の投稿があり、1回目の査読を経て掲載不可となったのは3本。残り10本は再査読となり、2回目の査読ではこのうち2本が掲載不可となり、1本が掲載可、7本が再々査読となった。3回目の査読では7本すべてが掲載可となった。この結果、計8本の論文が掲載の運びとなった。続けて北村理事から、今期は前々期から導入された三回査読制を初めて適用する年となった旨説明があり、三階査読によって「掲載論文の質の向上＝若手会員への教育的措置/学会の活性化」を図ることはできたが、他方で、査読者には過重な負担を掛けることとなり、編集委員の負担も増大したため、今年度は「実験」としても、今後も継続していくかは再度検討する必要があるとの問題提起があった。他の編集委員からも、今回は特集が2つ組まれたこともあって、編集にかかわる負担が増大したとの指摘があった。この件に関しては、今後も継続審議していくことになった。論文・特集の他にも、聞き書き資料1本、書評6本（入稿待ち1本）、自著紹介2本、実践報告1本が掲載予定で、今号は300ページ程度の分厚さになる見込み。

**【広報】**酒井朋子理事より、第46号ニューズレターについて、執筆者の確認と締め切り日8月3日（土）である旨の告知があった。

**【会計】**李理事より、2023年度決算と2024年度予算案が報告され、承認された。

**【事務局】**佐藤理事より、学会ホームページの作新について2024年度中にリニューアルできる見込みであることが報告された。

以上

### Ⅲ. お知らせ

#### 1. 国際オーラルヒストリー学会のお知らせ 「Go to IOHA」

JOHA 会員のみなさまへ

IOHA (International Orall History Association、国際オーラル・ヒストリー学会) は、世界をまたぐオーラル・ヒストリーの学会です。大会は2年ごとに行われ、今回は昨年7月、ブラジルのリオで、そして次回はポーランドの古都クラクフで開かれます。2025年9月16日～19日です。

朗報です。なんと、発表申し込みの締め切り日が、8月31日(土)へと、1か月ほど延期されました。まだ応募していないみなさん、チャンスは十分にあります。

以下をご覧ください。

[the 23rd IOHA Conference - Home](#)

[the 23rd IOHA Conference - Call for papers](#)

プロポーザルには、以下の項目から1つ、ないしは複数の内容を含むように、奨励されています。

Political involvement or independence: is ethical neutrality achievable and morally correct in a polarized world?

Methodological standards: how much does the technological development of AI challenge them?

Healing the wounds: how far can the therapeutic role of oral history go?

Oral history responses to human crises: what methodological and ethical problems of emergency documenting and archiving may we use?

“Lending our ears” (Portelli): how can we provide silenced and marginalized voices access to the public discourse?

Oral history and environmental history: what are the areas of cooperation?

Empowering community archives: how to teach them to create their own oral histories?

How do we balance the dominance of Western academia with the voices of the non-Western world? – agency and resources.

Globality versus locality of oral history: how to translate local practices into internationally recognized scholarship?

Post-coloniality: how does oral history help societies reckon with colonial pasts and assist in building post-colonial futures?

Disseminating oral history: what new methods can we use to present interviews to our audiences?

Multilingualism as a challenge to global oral history: how to record stories in mother tongues?

念のため、仮訳を付けておきます。

▲ 政治的関与または独立:倫理的中立性は、二極化された世界で達成可能であり、道徳的に正しいでしょうか?

▲ 方法論的基準: AIの技術開発は方法論的基準にどのくらい挑戦していますか?

▲ 傷を癒す: オーラルヒストリーの治療的役割はどこまで進むことができますか?

▲ 人間の危機に対するオーラルヒストリーの対応: 緊急文書化とアーカイブはどのような方法論的およ

び倫理的問題に使用できますか？

▲ 「私たちの耳を貸す」(ポルテッリ): どのようにして沈黙し、疎外された声に公共の談話へのアクセスを提供することができますか？

▲ オーラルヒストリーと環境史: 協力の分野は何ですか？

▲ コミュニティアークाइブのエンパワーメント: 独自のオーラルヒストリーを作成する方法を教える方法とは？

▲ 西洋の学界の優位性と非西洋世界の声のバランスをとるにはどうすればよいですか？ - 機関とリソース。

▲ グローバリティ対オーラルヒストリーの地域性: 地元の慣行を国際的に認められた学術に置き換える方法とは？

▲ ポストコロナリズム、オーラルヒストリーは、社会が植民地時代の過去を考慮し、ポスト植民地時代の未来を築くのにもどのように役立ちますか？

▲ オーラルヒストリーの普及: インタビューを聴衆に提示するために、どのような新しい方法を使用できますか？

▲ グローバルなオーラルヒストリーの挑戦としての多言語主義: 母国語で物語を記録する方法とは？

大会のテーマは、「(戦争や紛争が起こっている今)、どういう歴史を私たちは語ることができ、現在と未来の世代に受け渡すことができるのか」です。歴史の痛みを知るポーランドだからこそ語られる歴史の重みを感じるトポスとなるでしょう。

会場となるポーランドのクラクフは、京都に比べられる世界的な古都で、美しい街です。歴史地区は世界遺産になっています。若手研究者は IOHA からの渡航費の補助制度がありますのでご一考ください。

IOHA に関する質問は何なりとお寄せください。できる限り素早く回答します。

国際担当理事: 中尾知代・岡山大学 (oralhistory.nakao(at)gmail.com)

小黒純・同志社大学 (ogurojun(at)gmail.com)

## 2. 会員異動 (2024 年 2 月 26 日～2024 年 7 月 30 日)

新入会員 (入会順)

1. 堀ひかり 東洋大学文学部 教員
2. 桑山碧実 大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程
3. 河村裕樹 松山大学 人文学部 社会学科
4. 小口藍子 お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科  
ジェンダー学際研究専攻 博士後期課程
5. 張唯 筑波大学 人文社会科学研究群 国際公共政策学位プログラム  
博士後期三年
6. 劉コウ 名古屋大学人文学研究科 博士研究員
7. 森川麗華 東京大学大学院学際情報学府 博士後期課程

- |                 |  |
|-----------------|--|
| 8. 佐伯浩之         | 宮崎大学地域資源創成学部客員教授   |
| 9. 島崎遙          | 近畿大学大学院 総合文化研究科 日本文学専攻   |
| 10. 座間味希呼       | 大阪大学大学院博士後期課程  |
| 11. 長田律子        | 立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程<br>園田学園女子大学 人間看護学科 在宅看護学准教授              |
| 12. 澤田雅斗        | 一橋大学大学院社会学研究科・大学院生   |
| 13. 石井清輝        | 高崎経済大学地域政策学部 准教授   |
| 14. 山本かほり       | 愛知県立大学 教員  |
| 15. 坂本知壽子       | 立命館大学 授業担当講師等  |
| 16. 久野亜希子       | 東京都立大学人文科学研究科博士課程  |
| 17. 藤代陸         | 株式会社 地域文化財研究所・契約社員   |
| 18. 各務宇春        | 立命館大学 (職員)   |
| 19. 屈帥帥         | 大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程  |
| 20. HAO XIANGYU | 岡山大学院社会文化科学研究科 院生  |
| 21. 谷口生貴斗       | 筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院<br>人文社会科学研究群人文学学位プログラム歴史・人類学サブプログラム<br>博士前期課程 |

#### 退会者

古波蔵剛、長谷川倫子、大川ヘナン、大庭悠希、原仲碧、鍛冶葉子、韓光勲、高江洲昌哉、西垣真澄、野中由紀

※連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は事務局までご連絡ください。

（事務局 佐藤量・根本雅也）

### 3. 2024年度（2024年4月1日～2025年3月31日）会費納入のお願い

平素は学会運営へのご協力、まことにありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金の日ほどよろしく願いいたします。

会費のご納入につきましては、9月末日までにお願いしたく存じます。学会誌の一斉発送の時期を過ぎますと、ご納入確認がとれた後に、個別に学会誌発送手続きをとらせていただくことになり、事務局の作業負担の増大につながります。ご理解の日ほどよろしく願いいたします。

また、一部ですが、2023年度・2022年度分についても未納の会員がいらっしゃいます。こちらも早めの入金をよろしく願いいたします。

なお、所属機関名義で振り込まれる場合は、別途、会計宛に入金した旨をご連絡ください。（どの会員からの振り込みなのかを確認できないケースが相次いでいます。ご注意ください。）

## ■年会費

一般会員：6000円 学生・その他会員：3000円

\*2023年度より一般会員の会費を5000円から6000円に値上げしました。振込の際にはご注意ください。

\*「学生・その他会員」の「その他」には、年収200万円以下の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に振込票にその旨明記してください。(住所・所属の変更、退会の申し出などの連絡は、振込票ではなく事務局にメールでお願いいたします。)

\*年会費には学会誌代が含まれています。

## ■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

\*払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

\*従来と記号・番号は変わりありません。

## ■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店名：〇一九（ゼロイチキュウ）

店番：019

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便振込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて個別に領収書も発行させていただきますので、その際にご連絡ください。

その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の李（leehj(at)css.kobegakuin.ac.jp）までお問い合わせください。

(会計 李洪章)



.....

**日本オーラル・ヒストリー学会**  
**Japan Oral History Association (JOHA)**

\*\*\*\*\*

JOHAニューズレター第46号

2024年8月15日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒186-8601 東京都国立市中2丁目1番地

一橋大学大学院社会学研究科

日本オーラル・ヒストリー学会事務局 根本雅也 宛

E-mail [joha.secretariat\(at\)ml.rikkyo.ac.jp](mailto:joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp)

\* 郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。

\*\*\*\*\*